

人権教育に関する特色ある実践事例

基準の観点

協力的・参加的・体験的な学習を効果的に進めている実践事例

1. 基本情報

○都道府県名及び市町村名

愛媛県伊予郡砥部町

○学校名

砥部町立宮内小学校

○学校のURL

<http://home.e-catv.ne.jp/miyauchi-syo/>

2. 学校紹介

○学級数

【通常の学級】 1 2 学級 【特別支援学級】 2 学級 【合計】 1 4 学級

○児童生徒数

【全児童数】 3 7 9 人（平成 2 4 年 5 月 1 日現在）
（内訳：1 年生 5 2 人、2 年生 6 6 人、3 年生 6 8 人、4 年生 7 5 人、
5 年生 6 3 人、6 年生 5 5 人）

○学校の教育目標、人権教育に関する目標など

【学校の教育目標】

心豊かに、たくましく生きる宮内っ子の育成

【人権教育に関する目標】

（目標）互いに認め合い、高め合う仲間づくり

（スローガン）「自分大好き 友達大好き 学校大好き」

○人権教育にかかる取組の全体概要

「自分の大切さとともに他の人の大切さを認めること」ができるためには、まず自尊感情を高めていくことが大切である。自尊感情は、人との関わりの中で自分のよさや存在意義を認識することで育つものと考え。そのためには、人と関わろうとする意欲、人とよりよく関わる技能が重要であるが、本校児童の実態から、適切に言葉を介して意思疎通を図り、よりよく人と関わる力を育成することが、課題として挙げられる。

そこで、互いに相手の立場を尊重し、相互理解を深めるコミュニケーション能力を身に付ける指導を工夫して人権感覚を高めるとともに、言葉の力を育て、互いの考えを伝え合っていく中で、自尊感情を育て、互いを高め合う集団に育てたいと考え、次の 3 点を柱とした研究に取り組んできた。

- (1) コミュニケーション能力を育てる指導の工夫
- (2) 仲間意識を育てる集団づくりの工夫
- (3) 家庭や地域との連携の工夫

このうち、特色のある実践として、(1)と(2)から取組事例を述べたい。

3. 特色ある実践事例の内容

(1) 【コミュニケーション能力を育てる指導の工夫】

◆ 体験的な学習の充実

コミュニケーション能力を高めるためには、人権に関する学習についての体験的な活動や、地域・関係機関等と連携しての活動が重要であると考え、人との関わりを通した様々な活動を計画し、実践した。

ア 1年生の実践例【生活科「たのしさいっぱい あきいっぱい」】

秋の自然の材料で簡単なおもちゃ作りをした。材料集めやおもちゃ作りを通して友達と協力したり、自然の移り変わりを体感したりした。完成したおもちゃを使って、幼稚園・保育所の園児を招待し交流した。

おもちゃの遊び方を説明したり、おもちゃで遊んだりする中で、遊びのルールや約束を工夫しながら楽しく交流することができ、人を大切にすることの基礎的な考え方を身に付けることができた。



【幼稚園・保育所との交流】

イ 2年生の実践例【生活科「どきどきわくわく まちたんけん」】

地域への愛着を深めるために身近な地域の人々と関わったり、様々な場所やものを調べたり利用したりする町探検を実施した。

より親密な関わりがもてるように商店や食堂、結婚式場、文房具店など17か所に交流を依頼した。

児童は10グループに分かれ、保護者のサポーターとともに1～3か所を訪問した。自分たちの生活と大きく関わりのある仕事をしている人がおり、互いに支え合って生活していることに気付いた。この活動を通して挨拶を交わし合う児童が増え、地域との交流の輪が広がった。

ウ 3年生の実践例【総合的な学習の時間「砥部町の自まんを見つけよう」】

砥部町のよさを知り、地域への愛着を深めるために年間を通して総合的な学習の時間に「陶街道五十三次」を中心に砥部町の各地域を巡った。

1学期は砥部町北部のポイントを巡り、古い建物を見たり昔の言い伝えに触れたりして歴史の深さを感じた。また、七折方面巡りでは、見事な梅林があることに気付いた。巡ったところにあったものと同じ梅が校庭にもあり、七折梅組合から贈ら



【地域の方との交流】

れたことを知り、「七折小梅」の学習を始めた。特産物「七折小梅」の収穫やそれを生かした梅シロップ・梅干しづくりを体験したり、七折梅組合の方の特産品になるまでの苦労や世話の仕方、地域や子どもたちへの思い等を聞いたり

これらの学習を通して、地域の産業や人々のすばらしさを味わい、地域に誇りをもち、そこで生きる人々を大切に感じて暮らしていこうとする意識を高めている。

題

しんみんさんの戸外へ行た

本気

本気になると
世界がかわる
自分かわる
かあ、こゝろが
まだ本気になて
本気なこい
本気な仕事
あ、一度
こゝろを
つかまへんことは

氏名

わたしはしんみんさん
の所に行きました。い
っぱい詩を作ってい
たのでびくくりしま
した。わたしは本
気という詩がす
きです。わけは、と
てもゆうきが出そ
うな詩だからで
す。とてもすごい人だ
と、思いました。

【坂村真民記念館見学の感想】

習を行った後、3月にオープンした「坂村真民記念館」を訪れた。記念館では、館長さんから真民氏の生涯について説明を聞き、作品を見学したり、付属の図書を閲覧したりした。その後、真民さんの作品を通して、人柄について考える学習も行った。

平成 24 年度は、自他の生命を尊重し、力強く生きていこうとする態度を育てることをねらいとして、「二度とない人生だから」の詩で道徳における自作資料を作成し、授業を行った。

★（授業実践 第 6 学年 道徳）

学習指導案

1. 主題名 生きる喜び（3－(1)生命尊重）
2. 資料名・出典 二度とない人生だから
（自作資料 坂村真民さんの生き方から）
3. 本時の目標 自他の生命を尊重し、力強く生きていこうとする心情を育てる。
4. 準備物 資料「二度とない人生だから」（プリント） ワークシート
短冊黒板 C D プレーヤー
- 5 展開

	学 習 活 動	主な発問と予想される児童の意識の流れ	指導上の留意点
出合う	1 坂村真民さんの写真や詩から感じたことを話し合う。	○ 砥部町在住の真民さんの生き方についてどんなことを思っただろう。 ・がまん強い。 ・すばらしいと思うけど、まねはできない。	○ 児童の思いを自由に発表させ、生き方についてのねらいとする価値への方向付けをする。
認め合う	2 資料「二度とない人生だから」を読み、わたしの気持ちを考える。 ・ お墓に乳をかけて歩く母を見たわたしの気持ち	◎ 子どもたちのお墓に乳をかけて歩く母を見て、わたしはどんなことを考えただろう。	○ 切り返しや揺さぶり発問をかけて児童の本音を出させ、どの子にも差別をせず、平等な行動をとった母親の偉大さを感じ取らせる。

(2) 【仲間意識を育てる集団づくりの工夫】

◆ 支持的風土づくりの推進

互いを認め合い、支え合い、時には戒め合うような支持的風土の育った学級では、自尊感情を基盤とする信頼感と連帯感が培われる。それは、差別を見抜く目を養い、何が正しいかを自ら考え、判断し、実践していく児童を育てることにつながり、差別解消の大きな力となる。そこで、支持的な風土づくりのために全校ミニエクササイズの時間「かがやきタイム」の充実に重点的に取り組んだ。

【全校ミニエクササイズの時間「かがやきタイム」】

一人一人の児童が、かけがえのない存在として互いを知り合い、よさを認め合う場として、平成 23 年度から毎月 1 回、全校ミニエクササイズの時間「かがやきタイム」を設け、継続的に活動してきた。その結果、友達と触れ合うことを楽しみ、自分や相手を受け入れようとする意識の高まりが児童の感想やつぶやきから実感できるようになった。

しかし、実践を重ねるうちに、「全校同じ内容で行ったため、発達の段階に合ったものになっていない」「ソーシャルスキル不足の児童が多い」という問題点や新たな課題が明らかになった。意見を述べ合いながらよりよい仲間づくりを目指すためには、自分の思いを伝える技能が重要となる。そこで 23 年度 3 学期からは、ソーシャルスキルトレーニングを



取り入れること、低・中・高学年に適したエクササイズにすることに留意して、活動計画の改善を行った。実施に当たっては、肯定的な言葉掛けに努め、振り返りの時間を重視するようにした。

【平成 24 年度 かがやきタイム年間活動計画】

回	月	テ ー マ	エクササイズ	備 考
1	4	自分や友達のことをもっと知ろう	～さんの隣の～です	学級
2	5	互いに高め合う仲間になろう	分かりやすい話し方	低・中・高学年別
3	6	互いに高め合う仲間になろう	気持ちのいい話の聞き方	低・中・高学年別
4	7	自分や友達のことをもっと知ろう	自分への賞状	学級
5	9	自分や友達のことをもっと知ろう	夏休み心に残っていること	きょうだい学年で交流
6	10	互いに高め合う仲間になろう	相手を傷つけない断り方	低・中・高学年別
7	11	自分や友達のことをもっと知ろう	ご注文はどっち	学級

8	12	自分や友達のことをもっと知ろう	自分への賞状	学級
9	1	自分や友達のことをもっと知ろう	冬休み心に残っていること	きょうだい学年で交流
10	2	互いに高め合う仲間になろう	相手を傷つけない断り方	低・中・高学年別
11	3	自分や友達のことをもっと知ろう	自分への賞状	学級

＊ ゴシック部分は平成24年度に改善した事項

注) 「きょうだい学年で交流」は、全校同じ内容のエクササイズを、1・2年、3・4年、5・6年の2学年ずつで活動するもの。「低・中・高学年別」は、発達段階に応じた内容で活動するもの。

4. 実践事例の実績、実施による効果

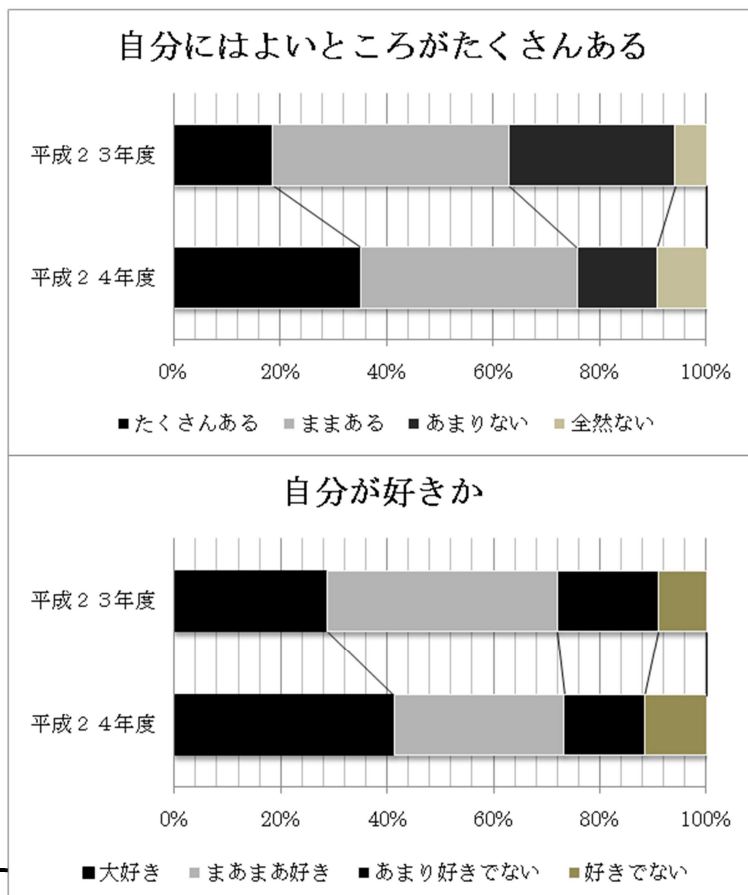
【取組の成果について】

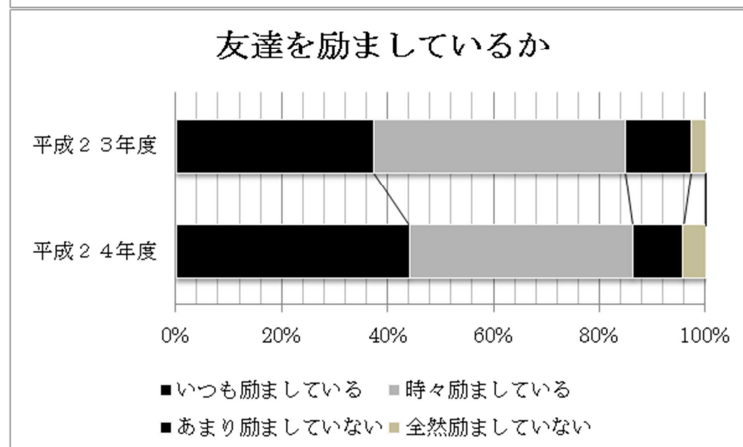
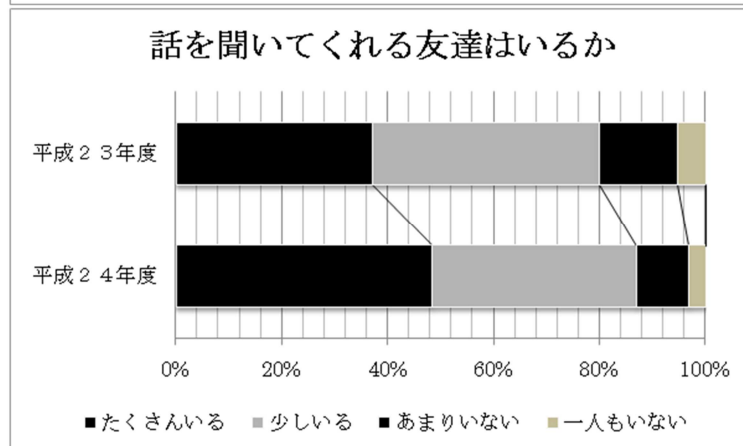
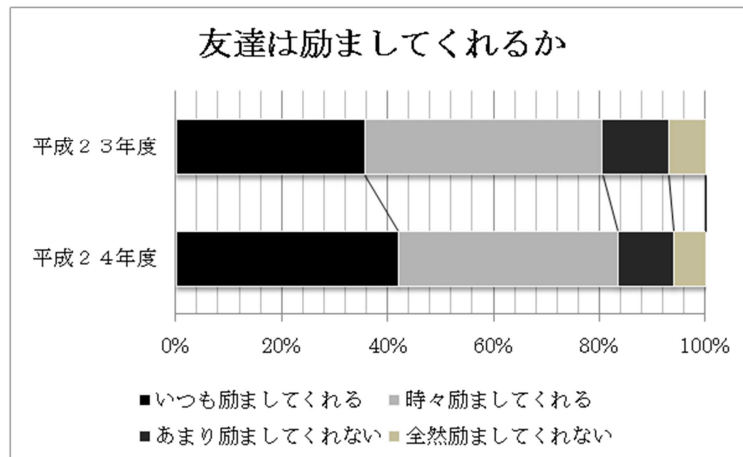
◆ 体験活動の充実

- 地域の人材の発掘、活用により、地域の文化や砥部町に関わりの深い人物について理解を深めることができ、自作教材などを通して地域に根ざした人権文化を学習することができた。

◆ 支持的風土づくりの推進

- 1学期最後のかがやきタイム後のアンケート（377名、平成24年7月実施）では「自分のよさに気付いた」という児童が80%、「友達のよさに気付いた」という児童が90%見られ、自他のよさを認めることが実際の行動として表れるようになった。
- 自尊感情についての児童の意識調査を行った結果は次の通りである。





(平成23年6月と平成24年6月実施 対象：全校児童)

上段が平成23年度、下段が平成24年度

児童の意識調査の結果から「自分が好き」「自分にはよいところがたくさんある」といった自己肯定感が向上している。他者から認められる機会を意図的に設定してきた成果であると考える。

エクササイズを繰り返し行ってきた結果、児童相互の関係がよくなってきている。「友達は励ましてくれるか」「友達を励ましているか」「話を聞いてくれる友達はあるか」の問いに対して、よい面が育ってきた。

5. 実践事例についての評価

【保護者や地域住民からの反応】

- 学習や行事を通して、地域の人との交流の機会も増えてきた。児童と地域の人との関わりを通して、地域の方々の学校への関心が高まった。また、学校における人権教育の取組を計画的・継続的に発信することに努めた結果、学校の取組に対する保護者の意識も向上した。

〔保護者の感想〕

- ・ 家庭でも友達との関わりについて話してきたが、相手の気持ちをくみ取り、思いやりをもって接することの難しさを感じている。親が子どもの見本になれるよう、強く温かい心のある人間でありたい。
- ・ 一人一人ができることがまだまだあると感じたので、できることを見付けて人のために働けるよう、親も子も変わっていきたい。

〔地域の方の感想〕

- ・ 子どものころ宮内小学校に通っていることを誇りに思っていた。今もこのような教育が続けていることに敬意を表す。子どもたちが同様に母校や社会を見守っていけるような心を養っていければと思う。

【今後の課題】

- 各教科等の学習内容を検討し、新たな教材の開発や人材の発掘に努め、地域との関わりを深める様々な活動を積み重ねていくことが重要である。情報交流や啓発活動についても、双方向的な取組になるような連携を図る必要がある。

【 人権教育の指導方法等に関する調査研究会議によるコメント 】

砥部町立宮内小学校

人権教育が目指す「自分の大切さとともに他の人の大切さを認めること」ができるようにするため、「コミュニケーション能力を育てる指導」、「仲間意識を育てる集団づくり」を柱として取り組んだ事例である。

本校ではコミュニケーション能力を高めるため、学年に応じた体験的な学習を行っている。地域の施設等で特産品について学び、先達に関する話を聞き、調べたりすることは、地域の人との関わりの中で人権感覚を養おうとする試みとなっている。

また、自他の大切さを理解するためには、互いを認め合う支持的風土や仲間意識を育てることがポイントとなるとして、テーマを決めてエクササイズに取り組む「かがやきタイム」を実施しているが、これが児童の相互理解に結び付いていることが伺える。

体験的な学習と支持的風土づくりの活動を組み合わせて、「自他の人権を尊重する」という人権教育の目標達成を目指した事例として参考になる。